

れるので、一部局でマニュアル処理（登録番号取得システム）と機械処理（収書トータルシステム）を併用することもできます。また、登録番号取得と同時に受入記録が保存でき、各部局から随時受入統計を出力することが可能になりました。この番号取得システムは、多くの部局図書館・室で導入されて、受入処理の流れの簡素化や、処理期間の短縮に役立っています。

4. システム利用者として

1998年5月の本稼働から約1年半の間図書収書システムとつきあって感じることは、システムと協調できる柔軟な思考能力の大切さです。収書システムはこれまでの受入業務のやり方を基本にして作られてはいますが、従来の方法にあまり拘泥すると、却って不便になる場合もあ

ります。システムのもつ便利さを生かせるように、使い手側が仕事の流れを組み立て直す柔軟性をもつことが求められています。また、このシステムでは図書受入業務と他の業務（特に雑誌受入や目録）とが密接に関連しあっているため、従来の役割分担の壁を取り払って、他業務の担当者と積極的に情報交換を行うことも必要です。日常業務の中で、長年親しんできた方法を見直し、システムとの上手なつきあい方を模索するのはなかなか大変なことです。しかし、さまざまな意味で転換が迫られている今日の中で、仕事の合理化や標準化を考えていく一つのきっかけにもなるのではないかと思います。

（しま ぶみこ：収書システムWG

附属図書館情報管理課受入掛）

新雑誌収書システムを利用して

富岡 達治

1. はじめに

京都大学では、1998年4月より新雑誌収書システムの運用を開始しました。当初はワーキンググループメンバー図書室のみでの運用でしたが、1999年1月より他の図書館・室での運用も開始し、導入図書室は徐々に増えつつあります。当初は、さまざまな不具合もありましたが、現在では、おおむね安定して稼働しています。

2. iLiswave収書システム

従来、各図書館（室）での雑誌のチェックインは、ビジブルカードや受付簿を使い、手作業で行って来ました。しかし、今回導入した新システム（iLiswave）は、目録システムと密接に連携したオンラインシステムです。

チェックインを行うと、半日以内にOPAC上に反映されるため、利用者は欠号を含めた到着状況を図書館（室）に来なくても把握できるようになりました。また、1冊1冊のチェックインデータは1週間に1回、一括所蔵データ（NACSIS-CATのローカル雑誌所蔵データ）に反映されます。この一括所蔵データをNACSIS-

CATにアップロードすることにより、学術雑誌総合目録の全国調査時期を気にすることなく、データを最新の状態に更新することが可能となりました。

チェックインの作業は、ビジブルカードと比較してもそれほど手間がかかるというわけではありません。直前のデータから巻号次や年月次を予測してくれますし、価格も自動設定されますので、単純なものであればボタンを数回押すだけで完了してしまいます。さらにチェックイン作業の省力化には自動チェックインという機能があります。これは雑誌の納品時に納品データをフロッピーディスクなどの形で電子的に受け取り、そのデータを使ってチェックインを行うものです。一回のチェックイン量にもよりますが、大量であればあるほど、チェックイン作業量の軽減化を図ることが可能となります。このような機能を有効に活用することは、定員削減等の厳しい状況への1つの対応手段となるはずで

さらに、システムでチェックイン作業を行う

ことにより、未着・欠号管理から支払管理、製本作業までトータルに管理することが可能となっています。このようにiLiswaveでは1つのデータを活用し、連携させることによってさまざまな機能を実現しています。

3. 外国雑誌前払システム

この外国雑誌前払システムは、全学の外国雑誌の購入状況を把握することができます。前金払の外国雑誌については発注から入札・契約、精算・戻入のデータを一括で管理します。

従来、この作業は汎用機を用いて行っていたが、新システムではサーバ・クライアント方式を導入し、各部局からデータの入力や帳票出力をオンラインで行えるようになりました。また、このシステムは契約用データを扱うという事情から、iLiswaveとは独立して稼働しています。

このシステム導入の影響は予想以上に大きく、例えば、精算処理を行う場合、従来ではデ

ータシートの提出からデータ入力、入力確認までは1週間から10日を費やしていましたが、新システムではたったの数十分程度で済むようになりました。

4. 今後の運用と課題

以上のように新システムには多くの便利な機能が提供されており、これらの機能を十分に活用することが必要になります。

しかし、運用する図書館員にとっては、従来独自に行っていた手作業中心の管理から、パッケージで提供される機能での機械管理へという大転換が求められることとなりました。

今後は、システムの安定稼働とともに、更なる機能の充実が望まれます。また、従来の運用をそのまま踏襲するだけではなく、iLiswaveの機能を100%引き出すような新しい運用を模索する必要があるのではないのでしょうか。

(とみおか たつじ：収書システムWG

附属図書館情報管理課受入掛)

新しい目録業務システムについて

赤井規晃

ここ数年のインターネットの発展には目ざましいものがある。その影響は、図書館の世界でいえば、wwwを介したOPACの提供が標準化していることから、十分窺い知ることができるであろう。さらに、国内各大学の図書館が提供しているそれらOPACの基盤を成す学術情報センターのNACSIS-CATシステム(オンライン・ネットワーク方式による全国規模の共同分担総合目録データベース)も、平成10年1月よりサーバ・クライアント方式のNACSIS-CAT2のサービスを開始し、従来のメイン・フレームからオープン・システムへの移行を着実に進めており、インターネット時代に対応した図書館業務システムは各大学図書館の最も関心ある課題となっている。平成9年度のリプレイスで京大図書館が、NACSIS-CAT2の接続第一号館となり、全面的に利用したトータル図書館システムを全

国に先駆けて導入することとなったのも、上述の動向に沿うものである。昭和60年の本格的電算化の開始以来、二度のリプレイスを経て、NACSIS-CATと密接な連携をもつ全学的な目録業務システムの基盤は整備されてきてはいたが、今回の新システムの導入により、より効率的な目録業務を行える環境が整えられることとなった。改善点は多々あげられるが、ここでは、データベースへの目録登録作業に関わる部分で簡単に紹介しておく。

NACSIS-CATへの書誌・所在データの登録・更新処理が、ローカル目録ファイルに即時的に反映されるようになった。これにより従来ホスト上で夜間バッチ処理によるデータの落とし込みをしていたのが不要となった。

NACSIS-CATおよびローカル目録ファイル双方への所蔵レコードの一括登録・更新処理を